第 6 章　文の構造と種類

この章では，マテンゴ語の文の基本構造と文の種類について述べる。文の種類については，これまで主に一般動詞を用いた単文を扱ってきたが，ここでは be 動詞文，疑問文，複文などについて説明する。また，5.6.「動詞の活用」で扱わなかった複文にのみ用いられる活用形についてもこの章で述べる。なおこの章では例文の番号を各節で振り直す。

6.1. 文の構造と語順

6.1.1. 文の構成要素

マテンゴ語の動詞文は以下のように構成される。

主語 ＋ 連体修飾語（群）＋ 動詞 ＋ 目的語 ＋ 連体修飾語（群）＋ 文修飾語（群）

1) dʒimbwa　dʒibútuka　　「犬が走る」

主語　**動詞**

dʒimbwa　dʒi - bútuk - a

「犬(9)」　S(9) - 「走る」 - 基F

2) lúdʒusi　lúṇdumíti　kapêŋga　　「蜂がカピンガ氏を刺した」

主語　**動詞**　**目的語**

lúdʒusi　lu - a - mu - lúm - iti　kapéŋga

「蜂(11)」　S(11) - 過T - O(1) - 「かむ」 - 完F　「カピンガ氏(1)」

3) litõmbela　likolôŋgu　ljúṇdumíti　kapêŋga

主語　**連体修飾語**　**動詞**　**目的語**

「大きな猿がカピンガ氏に噛みついた」

litõmbela　likolóŋgu　li - a - mu - lúm - iti　kapéŋga

「猿(5)」　「大きい(5)」　S(5) - 過T - O(1) - 「かむ」 - 完F　「カピンガ氏(1)」

4) kídʒuni　kjúŋhɔɲwî　ŋkósi　dʒwâŋgu　pulúbandza

主語　動詞　目的語　連体修飾語　文修飾語

「鳥が裏庭で私の友人をつっついた」

kídʒuni　ki - a -mu - hóɲɔl - i(ti)　ŋkósi　dʒwáŋgu　pulúbandza

「鳥(7)」　S(7) - 過T - O(1) - 「つっつく」 - 完F　「友人(1)」　「私の(1)」　「裏庭で(16)」

例1は目的語をとらない自動詞，例2は目的語を伴なう他動詞，例3は主語を修飾する連体修飾語が加わった場合，例4は目的語を修飾する連体修飾語と場所を表わす文修飾語が加えられた場合である。例1～4はすべて主語名詞と目的語名詞が示された例であるが，例5のように主語名詞や目的語名詞が表示されない場合には，S辞とO辞がそれらを指す代名詞として機能する。このような場合には動詞だけで文が構成される。

5) lugúlumîti　「それ（11クラス）が君（2sg）を刺した」

lu -　a -　gu - lúm　- iti

S(11) - 過T -　O2sg - 「かむ」 - 完F

6.1.2. 語順と主題化

基本的な語順は，主語 ・動詞・ 目的語 の順である。マテンゴ語の名詞には格表示はないが，主語名詞や目的語名詞は，これらに文法呼応する動詞接辞によってある程度は示される。この文法呼応接辞によって名詞の役割が明確である限り，語順は流動的である。主語と目的語がどこに位置しても，その連体修飾語は，必ず被修飾名詞の直後に位置する。

6) lúdʒusi　lúkolôŋgu　lúndumîti　kapêŋga　「大きな蜂がカピンガ氏を刺した」

主語　連体修飾語　動詞　目的語

lúdʒusi　lukolóŋgu　lu - a - mu - lúm - iti　kapéŋga

「蜂(11)」　「大きい(11)」　S(11) - 過T - O(1) - 「かむ」 - 完F　「カピンガ氏(1)」

7) kapêŋga　lúdʒusi　lúkolôŋgu　lúndumîti　「カピンガ氏は大きな蜂が刺した」

目的語　主語　連体修飾語　動詞

8) kapêŋga　lúndumîti　lúdʒusi　lúkolôŋgu　「カピンガ氏は大きな蜂が刺した」

目的語　動詞　主語　連体修飾語

例７と８は，例６の語順を変えたものである。例７，８のように，目的語が主語の前に位置する場合，目的語は「主題化」され，焦点は目的語である「カピンガ氏」にあてられる。例７と８の間に意味的な差は見られない。

人物が目的語であれば，それに呼応するＯ辞を必ず付けなければならないが，例７'のように目的語が主題化された場合にはその限りではなく，Ｏ辞の接辞は任意である。

7') kapêŋga　lúdʒusi　lu - a - lúm - îti　「カピンガ氏は蜂が刺した」
「カピンガ氏(1)」「蜂(11)」　S(11) - 過T -「かむ」- 完F

さて，以上の例はすべて主語名詞と目的語名詞が別のクラスに属している場合であるが，主語名詞と目的語名詞がどちらも同じクラスに属する場合，語順と呼応はどのようになるだろうか。

9) tomu　aŋkómití　samuêli　「トムはサムエリを殺した」
「トム」　S3sg -　O3sg -「殺す」(完)　「サムエリ」
tomu　a - ŋ - kómití　samuêli

10) tomu　dʒu - kómití　samuêli　「トムはサムエリが殺した」

11) dʒu - kómití　samuêli　「サムエリが殺した」

12) a - ŋ - kómití　samuêli　「彼はサムエリを殺した」

Ｏ辞が入っている例９では，Ｓ辞 a-とＯ辞 ŋ- は，それぞれ tomu と samuɛli に呼応している。従って，tomuが動作者である主語，samuɛli が被動作者である目的語となる。しかしながら，例 10 ではＯ辞が入っていないので，samuɛli は目的語とは認められない。そこで tomuとsamuɛliのどちらか一方は主題化されていると解釈されることになる。主題化された名詞（句）を「トピック」と呼ぶことにするが，トピックは，常に主語より前に位置する。ここでは tomu がトピックということになる。従って，主語はsamuɛli で，dʒu -

はsamuɛli に呼応しているということになる。例 11 では動詞の前にトピックとなる名詞はないが，O辞が付加されていないことから，samuɛli はあくまでも主語であり，目的語として解釈されることはない。これに対して，例 12 のようにO辞が入れば，動詞の後ろに位置する名詞は一般的に目的語と解釈される。

なお，動作の直接の対象物を表わす名詞とは別に目的語がある適用形の場合の語順については，5.4.4.1.を参照されたい。

6.1.3. 文修飾語

文修飾語には，いわゆる副詞の他に，時や場所などを表わす名詞（句）が用いられる。文修飾語は，主語や目的語などの名詞に文法呼応することなく，常に同じ形で現われる。文修飾語であることを示す表示はない。

◆ **副詞**

ŋganîla	「さらに，もっと」	
ŋgamâha	「すごく」	
kásɔkɔ̌pi	「少し」	cf. -sɔkɔpi「小さい」
lihâha	「ひどく」	cf. -ilihaha「悪い」
nákanɔ̌pi	「非常に」	
mbolímbɔ̌li	「ゆっくり」	
sakâka	「たしかに」	
hélɔ	「もちろん」	
kwâlɛ	「たぶん」	
pângi	「ひょっとすると」	
kábeti	「再び」	

◆ **時を表わす名詞句**

lísu 「昨日」, kwǐsu 「一昨日」, kilâbu 「明日」, kálɔŋgɔhi 「昔」
hjɛhjɛhjê 「明け方」, ljoba mûtu 「正午＝太陽が頭の上」
mwɛhi gogupʧítɛ 「先月＝過ぎた月」
mwɛhi gôŋgi 「来月＝別の月」

◆ **前置詞＋名詞**

na：道具や手段，同伴など「随伴」を表わす前置詞。後続する名詞が名詞クラス

接頭辞をもつ３音節以上の名詞の場合には前置詞の後ろに母音挿入が起こる。

13) na kámwana 「赤ちゃんといっしょに」
14) nu lupídʒa (< na lupídʒa) 「お金で，お金を持って」
15) ni líɡɛla (< na líɡɛla) 「鍬をつかって」

ŋɡéli :「～なし」という「非随伴」を表わす前置詞。

16) twadʒemba ŋɡéli iŋɔ̂ma 「我々は太鼓なしで歌った」
「我々は歌った」 「太鼓(9)」

kwa : スワヒリ語からの借用語で，スワヒリ語からの直訳的な表現に用いられる。

17) kwa ndába dʒa hĕla 「あの理由で＝だから」
「理由(9)」 属(9) 「あれ(8)」

18) kwa malɔ́bi gâŋgi 「別のことばで＝つまり」
「言葉(6)」 「別の(6)」

◆ **場所クラス名詞**

場所を表わす場合には，場所クラスの名詞を用いる。16 クラスは場所だけでなく，時を表わす場合にも用いられる。その場合には，「瞬時」ではなく，幅のある「時間帯」を表わす。

pulukêla 「朝に」 (lukêla「朝(11)」)
pikipêpi 「寒い時期に」 (kipêpu「寒さ(7)」)
pikihímihi 「夕方」

複数の文修飾語が続く場合の語順には，以下のような傾向が見られる。

前置詞句 ＋ その他（時を表わす語以外） ＋ その他（時を表わす語）

19) twakɛsiti　máɲɔɲɔ　na　mbôpu　kábe　lísɔ

「我々は刈った」　「草(6)」　随伴　「鎌」　「再び」　「昨日」

「我々は，昨日再び鎌で草を刈った」

これはあくまでも傾向であり，常にこの語順で現われるわけではない。また，主語や目的語と同様に，文修飾語を文頭に置くことも可能である。ただしその場合，「主題化されて焦点がそこにあてられる」という作用があるのは，場所を表わす文修飾語の場合だけである。

6.2. 文の種類

これまで主に，一般動詞を用いる述語動詞文について述べてきたが，ここでは，それ以外の文について述べる。

6.2.1. be 動詞文

be 動詞の用法のうち，複合活用形として用いられる例を第 6 章であげたが，ここでは，be 動詞が単文で用いられる場合の用法について述べる。

be 動詞文の場合には，「目的語＋連体修飾語」をとりえない。必須要素は動詞と文修飾語である。

6.2.1.1. コピュラ文

コピュラ文は，常に be 動詞を用いるわけではないが，過去と未来のコピュラ文には be 動詞が用いられるので，ここで扱うことにする。

コピュラ文では，主語が 1 人称，2 人称の人物の場合に繋辞が用いられる。主語がそれ以外の場合には，繋辞は用いられない。繋辞の後ろには，後続する語の名詞クラス接頭辞あるいは代名詞接頭辞の母音が挿入母音として入る。

<表 1：繋辞>

人称	単数	複数
1 人称	n [1]	tu
2 人称	gu	mu

1) né　na　mwámatěŋgɔ　　「私はマテンゴ人だ」

né　n　mwámatɛŋgɔ́

「私」　繋辞　「マテンゴ人(1)」

2) twê　twa　ákamalìmu　　「我々は教師です」

twé　tu　ákamalímu

「我々」　繋辞　「教師(2)」

[1] 1 人称単数形の繋辞は，現われ方を見ると na であるとも考えられる。しかし，他の繋辞が S 辞と同形であることから，na ではなく n であると判断した。常に挿入母音といっしょに音節を作って現われる。

3) gwê gu ṇdâsu 「君は背が高い」

gwé gu ṇdásu

「君」 繋辞 「高い(1)」

4) mwê mwa alâsu 「君達は背が高い」

mwé mu alásu

「君たち」 繋辞 「高い(2)」

5) dʒwɔ̌mbɛ mwalǐmu 「彼は教師です」

dʒwɔ́mbí mwalímu

「彼」 「教師(1)」

6) baŋgaɲa alâsu 「彼らは背が高い」

baŋgaɲa alásu

「彼ら」 「高い(1)」

7) lúgɔdʒi alo̱ lúdʒipi 「このロープは短い」

lúgɔdʒi alo̱ lúdʒipi

「ロープ(11)」 「この(11)」 「短い (11)」

8) séndze kitéu sâkɛ 「これは彼の椅子です」

séndze kitéu sákɛ

「これ(7)」 「椅子(7)」 「彼の(7)」

後ろに形容詞が続く場合には，be 動詞の完了現在形が用いられることもある。その場合は，「そうではなかったものが現在はそうなっている」という変化の意味が含まれる。be 動詞が用いられる場合でも，主語名詞が１人称および２人称の場合には，後ろに繋辞が続く。

9) dʒubí ṇdâsu 「彼は背が（低かったのに今は）高い」

gu - bé -í(ti) ṇlásu

S3sg - be - 完F 「高い(1)」

9') mí nu ṇdâsu 「私は背が（低かったのに今は）高い」
n - bé -í(ti) n ṇdâsu
S1sg - be - 完F 繋辞(1sg) 「高い(1)」

10) lúgɔdʒi alõ lubi lúdʒipi 「このロープは（長かったのに今は）短い」
lúgɔdʒi alõ lu - bé -i(tí) lúdʒipi
「ロープ(11)」 「この(11)」 S(11) - be - 完F 「短い(11)」

過去と未来を表わすコピュラ文の場合には，必ず be 動詞が用いられる。主語名詞が 1 人称および 2 人称であれば，繋辞も共起する。過去の場合には過去完了形を用いるが，主語名詞が人物の場合には，過去を表わす時制辞 -a- の代わりに -aká- が用いられることもある。意味に違いはない。未来の場合には，単純未来形を用いる。

過去

11) nabí / nakábi nu ṇdâsu 「私は背が高かった」
n - a/ aká - bé -i(tí) n ṇdásu
S1sg - 過T - be - 完F 繋辞(1sg) 「高い(1)」

12) twabí / twakábi twa ákamalĩmu 「我々は教師だった」
13) gwabí / gwakábi gu ṇdâsu 「君は背が高かった」
14) mwabí / mwakábi mu alâsu 「君達は背が高かった」
15) dʒwabí / dʒwakábi mwalĩmu 「彼は教師だった」
16) babí / bakábi alâsu 「彼らは背が高かった」
17) lúgɔdʒi alõ lwabí lúdʒipi 「このロープは短かった」
18) kitéu sákɛ sabí kinjâhi 「彼の椅子は新しかった」

未来

19) níbja nu ndâsu 「私は背が高くなるだろう」
n - í - bé - a(dʒɛ) n ṇdásu
S1sg - 未T - be - 非完F 繋辞(1sg) 「高い(1)」

20) twíbja tu ákamalĩmu 「我々は教師になるだろう」
21) gwíbja gu ṇdâsu 「君は背が高くなるだろう」

22) mwíbja mu alâsu 「君達は背が高くなるだろう」
23) dʒwíbja mwalîmu 「彼は教師になるだろう」
24) bíbja alâsu 「彼らは背が高くなるだろう」
25) lúgɔdʒi alo̱ lwíbja lúdʒipi 「このロープは短くなるだろう」
26) kitéu sákɛ kíbja kinjâhi 「彼の椅子は新しくなるだろう」

◆ 否定形

否定形の場合には，動詞の後ろに否定語 ŋga が続く。動詞が現われない現在形では，否定語は主語名詞（句）の直後に位置する。

現在

1') né ŋga na mwámatěŋgɔ 「私はマテンゴ人ではない」
2') twé ŋga tu ákamalîmu 「我々は教師ではない」
3') gwɛ́ ŋga gu ṇdâsu 「君は背が高くない」
4') mwɛ ŋga mu alâsu 「君達は背が高くない」
5') dʒɔ̂mbɛ ŋga mwalîmu 「彼は教師ではない」
6') baŋgaɲa ŋga alâsu 「彼らは背が高くない」
7') lúgɔdʒi alo̱ ŋga lúdʒipi 「このロープは短い」
8') séndze ŋga kitéu sâkɛ 「これは彼の椅子」

過去

11') nabí / nakábi ŋga na mwalîmu 「私は教師ではなかった」
12') twabí / twakábi ŋga tu ákamalîmu 「我々は教師ではなかった」
13') gwabí / gwakábi ŋga gu ṇdâsu 「君は背が高くなかった」
14') mwabí / mwakábi ŋga mu alâsu 「君達は背が高くなかった」
15') dʒẇabí / dʒwakábi ŋga mwalîmu 「彼は教師ではなかった」
16') babí / bakábi ŋga alâsu 「彼らは背が高くなかった」
17') lúgɔdʒi alo̱ lwabí ŋga lúdʒipi 「このロープは短かった」
18') kitéu sákɛ sabí ŋga kinjâhi 「彼の椅子は新しかった」

未来

19') níbja ŋga na mwalîmu 「私は教師にはならないだろう
/教師ではないだろう」

20') twíbja ŋga tu ákamaĩmu 「我々は教師にはならないだろう」
21') gwíbja ŋga gu ṇdâsu 「君は背が高くならないだろう」
22') mwíbja ŋga mu alâsu 「君達は背が高くならないだろう」
23') dʒwíbja ŋga mwaĩmu 「彼は教師にはならないだろう」
24') bíbja ŋga alâsu 「彼らは背が高くならないだろう」
25') lúgɔdʒi alô̰ lwíbja ŋga lúdʒipi 「このロープは短くならないだろう」
26') kitéu sákɛ kíbja ŋga kinjâhi 「彼の椅子は新しくなくなるだろう」

6.2.1.2. 存在文

「～がいる，～がある」という存在を表わす場合にも be 動詞が用いられる。現在存在している，という場合には完了現在形を用いる。かつ存在していた，という過去の存在の場合には単純過去形，また，今後存在するだろう，という未来の存在の場合には単純未来形を，それぞれ用いる。語順は，主語すなわち「存在するもの」が動詞の後ろに位置する。「存在場所」は，「存在するもの」の後ろにも文頭にも位置することができる。ただし，主語名詞が省略されている場合には「存在場所」は必ず動詞の直後に位置しなければならない。

27) dʒibí míkɔŋgu dʒíŋgi mwikitêŋgu 「森の中に木がたくさんある」
dʒi - bé - i(tí) míkɔŋgu dʒíŋgi mu-kitéŋgu
S(4) - be - 完F 「木(4)」 「たくさん(4)」 「森の中(18)」

28) paɲûmba dʒa abí bandu bíŋgi 「私の家に人がたくさんいる」
pa-ɲúmba dʒa(ŋgu) a - bé - i(tí) bándu bíŋgi
「家に(16)」 「私の(9)」 S (2) - be - 完F 「人(2)」 「たくさん(2)」

cf. 28') abí paɲûmba dʒâŋgu 「彼らは私の家にいる」
a - bé - i(tí) pa-ɲúmba dʒáŋgu
S2pl - be - 完F 「家に(16)」 「私の(9)」

29) mɔ́mbɔ kibi kípɛpɔ 「この中は寒い」
mɔ́mbɔ ki - bé - i(tí) kípɛpɔ
「ここの中(18)」 S(7) - be - 完F 「寒さ(7)」

30) kálɔŋgɔhi gabi máhimba mwikíɲǎhi 「以前はジャングルにライオンがいた」

kálɔŋgɔhi ga - a - bé - i(ti) máhimba mu-kíɲahí

「以前」 S(6) - 過T - be - 完F 「ライオン(6)」 「ジャングルの中(18)」

6.2.1.3. 所有文

be 動詞の後に 「 na (随伴を表わす前置詞) ＋名詞 」の形を続けると，「～を持っている」という所有の表現になる。

31) nɛ mí ni ligâli 「私は車を持っている」

nɛ n - bé - i(tí) na ligáli

「私」 S1sg - be - 完F 随伴 「車(5)」

32) abí na ŋɔ̂mbɛ 「彼らは牛を持っている」

a - bé - i(tí) na ŋɔ́mbi

S3pl - be - 完F 随伴 「牛 (9/10)」

33) kitéu sěndze kibí na mágolu ŋ̀sɛsi 「この椅子には脚が４本ある」

kitéu sendzé ki - bé - i(tí) na mágolu ŋ̀sɛsi

「椅子(7)」 「この(7)」 S(7) - be - 完F 随伴 「脚(6)」 「４」

34) dʒwabi na mákili ŋgamâha 「彼は非常に力持ちだった」

dʒu - a - bé - i(ti) na mákili ŋgamáha

S3sg -過T - be - 完F 随伴 「力 (6)」 「非常に」

35) kitéu sěndze sabi na mágolu ŋ̀sɛsi 「この椅子には脚が４本あった」

kitéu sendzé si - a - bé - i(ti) na mágolu ŋ̀sɛsi

「椅子(7)」 「この(7)」 S(7) - 過T - be - 完F 随伴 「脚(6)」 「４」

36) ŋ̀kɔngu agǫ̂ gwíbja na mátunda gíŋgi

「この木はたくさんの実をつけるだろう」

ŋ̀kɔngu agǫ́ gu - î - bé - a(dʒɛ) na mátunda gíŋgi

「木(3)」 「この(3)」 S(3) -未T - be - 非完F 随伴 「 実 (6)」 「たくさん(6)」

37) bíbja na ŋɔ̂mbɛ 「彼らは（将来）牛を所有するつもりだ」
ba - í - bé - a(dʒɛ) na ŋɔ́mbi
S3pl -未T - be - 完F 随伴 「牛 (9/10)」

所有表現「na＋名詞」を用いて，存在を表わすこともある。その場合には，存在場所が主語となる。つまり，直訳すれば「・・・(場所）は～（存在するもの）を持っている」という表現になる。6.2.1.2.で述べた「存在するものや人」を主語にした存在表現では焦点が「存在しているものや人」にあたっているのに対して，例 38，39 のように「存在場所」を主語にする場合には「存在している場所」に焦点があたる。なお，主語になる場所名詞が 18 クラスの場合には，17 クラスに呼応した S 辞をとる（5.2.1.1.参照)。

38) mwikitêŋgu kubí ni míkɔŋgu dʒîŋgi 「森の中は，木がたくさんある」
mu-kitéŋgu ku - bé - i(tí) na míkɔŋgu dʒíŋgi
「森の中(18)」 S (17) - be - 完F 随伴 「木(4)」 「たくさん(4)」

cf.38') kitêŋgu kibí ni míkɔŋgu dʒîŋgi 「森は，木がたくさんある」
kitéŋgu ki - bé - i(tí) na míkɔŋgu dʒíŋgi
「森(7)」 S (7) - be - 完F 随伴 「木(4)」 「たくさん(4)」

38") *mwikitêŋgu mu - bí ni míkɔŋgu dʒîŋgi
S (18)

39) paɲûmba dʒa pabí na bandu bîŋgi 「私の家は，人が大勢いる」
pa-ɲúmba dʒá(ŋgu) pa - bé - i(tí) na bándu bíŋgi
「家に(16)」 「私の(9)」 S (16) - be - 完F 随伴 「人(2)」 「たくさん(2)」

6.2.1.4. 進行表現

動詞の不定形（15 クラス名詞）に 16 クラスまたは 18 クラスのクラス接頭辞を付加し，それを be 動詞に続けると，「～しているところである」という進行中の行為を表わす表現になる。これは直訳すれば，「～する（時間的）地点/中にいる」ということになり，「存在文」の応用とも言える。過去と現在に関しては，be 動詞の活用形は完了形が用いられる。

完了過去 ＋ pu−/ mu− 不定形

40) gwabí pukúsɔma kitâbu 「君は本を読んでいるところだった」

gu - a - bé - i(ti) pu - kúsɔma kitábu

S2sg - 過 T - be - 完 F Np(16) - 不定形「読む」 「本(7)」

完了現在 ＋ pu−/ mu− 不定形

41) tubí mukúlja úgwalɛ 「我々は練り粥を食べているところだ」

tu - bé - i(tí) mu - kúlja úgwali

S1pl - be - 完 F Np(18) - 不定形「食べる」 「練り粥(14)」

単純未来 ＋ pu−/ mu− 不定形

42) dʒwíba pukúpomulela 「彼は（その時）休憩しているだろう」

dʒu - í - bé - a(dʒɛ) pu - kúpomulela

S3sg - 未 T - be - 非完 F Np(16) -不定形「休憩する」

◆ 否定形

完了過去 ＋ pu−/ mu− 不定形

43) ŋgapa gwabí pukúsɔma kitâbu 「君は本を読んではいなかった」

ŋgapa gu - a - bé - i(ti) pu - kúsɔma kitábu

Neg S2sg - 過 T - be - 完 F 「Np(16) - 不定形「読む」 「本(7)」

完了現在 ＋ pu−/ mu− 不定形

44) ŋgasɛ tubí mukúlja úgwalɛ 「我々は練り粥を食べてはいない」

ŋgasɛ tu - bé - i(tí) mu - kúlja úgwali

Neg S1pl - be - 完 F Np(18) - 不定形「食べる」 「練り粥(14)」

単純未来 ＋ pu−/ mu− 不定形

45) ŋga dʒwíba pukúpomulela 「彼は（その時）休憩してはいないだろう」

ŋga dʒu - í - bé - a(dʒɛ) pu - kúpomulela

Neg S3sg - 未 T - be - 非完 F Np(16) -不定形「休憩する」

6.2.2. 疑問文

6.2.2.1. 一般疑問文

「はい / いいえ」で答えられる一般疑問文は，動詞の直後に疑問詞 lɛ̰lɔ̰を置く。疑問詞が文中に位置する場合には，疑問詞の最終音節は脱落する。

46) gumáɲiti lɛ̰ sámatɛ̌ŋgɔ̂ / sámatɛ̌ŋgɔ gumáɲiti lɛ̰lɔ̰

「君はマテンゴ語を知っていますか？」

gu - máɲ - ití　　lɛ̰lɔ̰́　　sámatɛŋgɔ́

S2sg -「知る」- 完 F　疑問詞　「マテンゴ語(7)」

47) dʒutama lɛ̰ kutɛmbɔ̂ / kutɛ̂mbɔ dʒutama lɛ̰lɔ̰

「彼はリテンボに住んでいるのですか？」

dʒu - tám - a　　lɛ̰lɔ̰́　　kutɛ́mbɔ

S3sg -「住む」-基 F　疑問詞　「リテンボに(17)」

48) dʒubi lɛ̰ mundu dʒɔ̰ dʒubí ni limbɛ́lɛlɛ

「羊を持っている人はいますか？」

dʒu - bé-i(tí)　lɛ̰lɔ̰́　múndu　dʒɔ̰　dʒu - bé-i(tí)　na　limbɛ́lɛlɛ

S3sg - be - 完 F　疑問詞　「人(1)」　R(1)　S3sg - be - 完 F　随伴　「羊 (5)」

49) galága lɛ̰ máhɔ̌mbî　「あれは卵ですか？」

galága　lɛ̰lɔ̰́　máhombí

「あれ(5)」　疑問詞　「卵 (5)」

ɛ̰na　「はい」

ŋga　máhɔ̌mbi　「いいえ，卵ではありません」

6.2.2.2. 特殊疑問文

特殊疑問文に用いられる疑問詞には，次のようなものがある。疑問詞が動詞の直後に位置する場合，動詞の最終音節の声調はHになる。疑問詞が文中に位置する場合には，疑問詞の２音節めは必ず脱落する。疑問詞が文末に位置する場合には脱落は任意である。

lilɛ 「いつ」
kwakɔ́ 「どこ」
ɲánɛ 「誰」
kikɛ 「何」
bɔlɛ́ 「どう」
-leŋgá 「どのくらい」

lilɛ ・・・「時」を問う疑問詞で，動詞の直後に位置する。

50) gwahɛmalá lilɛ 「いつ買いましたか？」
gu - a - hémɛl - a(dʒɛ) lilɛ
S2sg - 過 T-「買う」- 非完 F 「いつ」

51) gwídʒɛndá li kudʒápani 「いつ日本に帰りますか？」
gu - í - dʒénd - a(dʒɛ) lilɛ kudʒápani
S2sg - 未 T - 「行く」 - 非完 F 「いつ」 「日本へ(17)」

kwakɔ́ ・・・「場所」を問う疑問詞で，動詞の直後に位置する。

52) kapêŋga gumbwéni kwǎkɔ 「カピンガ氏を君はどこで見ましたか？」
kapéŋga gu - mu - bɔ́n - ití kwakɔ́
「カピンガ氏」 S2sg - O3sg -「見る」-完 F 「どこ」

53) dʒuhɛŋgá kwa 「彼はどこで働いていますか？」
dʒu - héŋg - a kwakɔ́
S3sg -「働く」-基 F 「どこ」

ɲánɛ・・・「誰」を問う疑問詞で，３人称単数に呼応した文法呼応接辞をとる。疑問の対象となっている語が位置するところに置く。

例 54 と 55 は，いずれも主語が疑問の対象となっている。例 54 は疑問詞のうしろに関係節を続けた表現で，例 55 は関係節ではなく普通の単文を続けた表現である。所有者を問う場合には例 57 のように属辞を続ける。

54) ɲâ dʒo̱ dʒwídʒɛnda ná nɛ 「私といっしょに行くのは誰ですか？」

ɲáne̱ dʒo̱ dʒu - í - dʒénd - a(dʒɛ) na né

「誰」 R(1) S3sg - 未 T -「行く」 - 非完 F 随伴 「私」

55) ɲâ dʒupa̱la kulɔmba ŋɔ̂mbɛ 「誰が牛を買いたいの？」

ɲáne̱ dʒu - pa̱l - a kúlɔmba ŋɔ́mbi

「誰」 S3sg -「～したい」-基 F 不定形「買う」 「牛(9/10)」

56) guṇdiŋgá ɲa̱nɛ 「誰をさがしているの？」

gu - mu - líŋg - a ɲáne̱

S2sg - O3sg -「さがす」- 基 F 「誰」

57) adʒê kalámɔ dʒáka ɲâne̱ 「それは誰のペンなの？」

adʒé̱ kalámɔ dʒáka ɲáne̱

「それ(9)」 「ペン(9)」 属(9) 「誰」

ki̱kɛ・・・「何」を問う疑問詞で，7クラスに呼応する。

例58と例59は，それぞれ，疑問の対象が主語と目的語の例である。例60は，理由をたずねる表現で，属辞の後ろに疑問詞が続いている。

58) kigoloká ki̱kɛ 「何が飛んでいるの？」

ki - gólok - a ki̱kɛ

S(7) -「飛ぶ」- 基 F 「何」

59) guliŋgalí ki̱kɛ 「何を見ているの？」

gu - líŋgali(l - a) ki̱kɛ

S2sg -「見つめる」- 基 F 「何」

60) ndába dʒa ki̱ ŋ́kɔŋgu gɔ́ŋgɔ guhábwiki páhɛ

「なぜこの木は倒れているの？」

ndába dʒá ki̱kɛ ŋ́kɔŋgu gɔŋgɔ gu - hábuk - ití pahí

「理由(9)」 属辞(9) 「何」 「木(3)」 「この(3)」 S2sg-「落ちる」- 完 F 「下」

例61はコピュラ文の例である。「それは～です」という答えには，答えとなる名詞のクラスに呼応した関係辞（6.3.1.2.参照）を用いることがある。

61) sěndzé kiɩkɛ 「これは何ですか？」
sendzé kiɩkɛ
「これ(7)」 「何」

61') leɩ líhiga 「それはかまど石(11)です」
R(5) 「かまど石(5)」

61") goɩ ŋ́dɔtu 「それはおはじき玉(3)です」
R(3) 「おはじき玉(3)」

bɔɩlé・・・「どのように」という様態，方法を問う疑問詞としてだけでなく，名詞の直後に位置して「どの～」という疑問指示詞としても機能する。その場合にも先行する名詞と文法呼応はしない。

62) ŋkɛmá bɔɩ kwa sámatěŋgɔ 「マテンゴ語で何と呼ぶの？」
mu - kém - a bɔɩlé kwa sámatɛŋgɔ́
S2pl -「呼ぶ」- 基F 「どのように」 前置詞 「マテンゴ語(7)」

63) gupaɩla kúhɛmalɛsa kitábu bɔ̌ɩlɛ 「どの本を売りたいの？」
gu - páɩl - a kúhɛmalɛsa kitábu bɔɩlé
S2sg -「要る，望む」- 基F 不定形「売る」 「本(7)」 「どの」

-leŋgá・・・「程度，量」を問う疑問形容詞で，被修飾名詞が属しているクラスに呼応した名詞クラス接頭辞をとる。被修飾名詞の後ろに位置する。被修飾名詞になり得るのは，複数形と不加算名詞である。

64) gupaɩla máhombí galéŋga 「卵はいくつ要りますか？」
gu - páɩl - a máhombí ga-leŋgá
S2sg -「要る」- 基F 「卵(6)」 「どのくらい(6)」

65) gubí na mjaká dʒilénga 「君は何歳ですか？」

gu - bé- i(tí) na mjaka dʒi-lengá

S2sg - be - 完F 随伴 「年(4)」 「どのくらい(4)」

66) síliŋgi iléŋga 「おいくらですか？」

síliŋgi i- leŋgá

「シリンギ(10)」[2] 「どのくらい(10)」

6.2.3. 否定文

否定接続法や禁止法のように活用形自体が否定の意味を持つものもあるが，それ以外の活用形の否定文は，次のように作られる。

6.2.3.1. 否定語による否定

直説法の各活用形，不定形，be 動詞文を否定する場合には，以下のような否定語が動詞の前に位置する。ŋgasé と ŋgapá，ŋgasɛ と ŋgapa は，いずれも区別なく用いられる。

ŋgasé / ŋgapá	・・・	単純現在形
ŋgasɛ / ŋgapa	・・・	単純過去形，完了過去形，完了現在形
ŋga	・・・	上記以外の活用形（接続法，希求法は除く）

否定語 ＋ 動詞

67) ŋgasé dʒugúbutukila 「彼は君を追いかけない（単純現在）」

68) ŋgasɛ dʒugúbutukílɛ 「彼は君を追いかけなかった（完了過去）」

69) ŋga dʒwagúbutukila 「彼は君を追いかけないだろう（単純未来）」

70) ŋga kúbutukila 「追いかけないこと（不定形）」

6.2.3.2. 一般動詞による否定

動詞 -lɛm- は，「～でない」という否定を表わす一般動詞であるが，この動詞に不定形の動詞を後続させると否定の表現になる。主に be 動詞文の否定に用いられ，一般動詞の

[2]タンザニアの通貨の単位。

否定にこの形が用いられるのは仮想形だけである。

-lɛm- ＋ 不定形動詞

71) nakálɛmiti kúba nu ɲdâsɔ 「私は背が高くなかった」

n -aká - lém - iti kúba n ɲdásɔ

S1sg-過 T -「～でない」- 完 F 不定形 be 動詞 繋辞 「高い(1)」

= nakábi ŋga nu ndâsɔ / né ŋgasɛ nabí nu ndâsɔ

72) gwílɛma kúba na ɲûmba 「彼は家を持たないだろう」

gu - í - lém - a(dʒɛ) kúba na ɲúmba

S3sg - 未 T -「～でない」- 非完 F 不定形 be 動詞 随伴 「家(9)」

73) aná nakálɛmíti kúhɛŋga líhɛŋgu lísɔ né ŋga kútɔtukɛla

「もし昨日仕事をしなかったら疲れていなかったのに」

aná n - aká - lém - iti kúhɛŋga líhɛŋgu lisú

「もし」 S1sg - 仮 T -「～でない」- 完 F 不定形「働く」 「仕事(5)」 「昨日」

né ŋga kútɔtukɛla

「私」 Neg. 不定形「疲れる」

6.2.4. その他の表現

6.2.4.1. 所有表現

所有表現は，所有形容詞（4.2.2.1.）や属辞（4.2.2.2.）を用いるのが一般的であるが，それ以外の表現で所有を表わすことがある。

6.2.4.1.1. 不可譲渡名詞の状態表現

所有物に関する描写のうち，身体の一部などの不可譲渡名詞が所有物の場合には，次のような表現が可能である。

74a) kwabagadʒa kúboku kwâŋgu 「私の手が震えた」

ku - a - bágadʒ - a(dʒɛ) kúboku kwáŋgu

S(15)- 過 T -「震える」 - 非完 F 「手(15)」 「私の(15)」

74b) né nabagadʒa kúboku 「私は手が震えた」

né n - a - bágadʒ - a(dʒɛ) kúboku

「私」 S1sg - 過T-「震える」 - 非完F 「手(15)」

74c) né kwabagadʒa kúboku 「私は手が震えた」

né ku - a - bágadʒ - a(dʒɛ) kúboku

「私」 S(15) - 過T - 「震える」 - 非完F 「手(15)」

動詞 -bágadʒ-「震える」の主語が，例 74a と 74c では「手」，例 74b では「私」である。このように，身体の一部や体内からの老廃物などといった「不可譲渡名詞」が行為・事態の主体である場合には，動詞は「所有者」と「所有物」のどちらでも主語にとることができる。いずれを主語にとっても同じ状況を表わすが，焦点に違いがある。例 74a は，焦点に関してはニュートラルな表現である。例 74b と 74c では，どちらも né「私」という単語を動詞の前に表示することで「私」が主題化されているが，例 74b ではさらに「私」を主語におくことで，より明確に焦点が「私」にあてられている。以下同様の例をあげる。

75a) dʒutúnwikí lihûpa 「彼は骨が折れた」

dʒu - túnuk - ití lihúpa

S3sg - 「折れる」 - 完F 「骨(5)」

75b) lihúpa ljâkɛ litúnwǐkɛ 「彼の骨が折れた」

lihúpa ljákɛ li - túnuk - ití

「骨(5)」 「彼の(5)」 S(5) - 「折れる」 - 完F

cf. 75c) dʒitúnwikí ṃbêu dʒâkɛ 「彼の杖が折れた」

dʒi - túnuk - ití ṃbéu dʒákɛ

S(3) - 「折れる」 - 完F 「杖(3)」 「彼の(3)」

75d) * dʒútunwikí ṃbêu 〔彼は杖が折れた〕

dʒu - túnuk - iti ṃbéu

S3sg - 「折れる」 - 完F 「杖(3)」

76a) dʒupi̱tití lihógatɛla ŋhjega dʒăkɛ 「彼は身体から汗がでた」

dʒu - pi̱t - ití lihógatɛla ŋhjega dʒákɛ

S3sg -「出る」- 完F 「汗(5)」 「身体から(18)」 「彼の(9)」

76b) lihógatɛla lipi̱tití ŋhjega dʒăkɛ 「汗が彼の身体からでた」

lihógatɛla li - pi̱t - ití ŋhjega dʒákɛ

「汗(5)」 S(5) -「出る」- 完F 「身体から(18)」 「彼の(9)」

77a) ɲálakwiki sóbu 「私は爪が剥がれた」

n - dʒálakuk - ití sobú

S1sg -「はがれる」 - 完F 「爪(7)」

77b) sobú sa né kidʒálakwĭkɛ 「私の爪が剥がれた」

sobú sá né ki - dʒálakuk - ití

「爪(7)」 属 (7) 「私」 S(7) -「はがれる」 - 完F

78a) pusi dʒinaŋana mĭhu ikĭlu 「夜，猫は目が光る」

púsi dʒi- náŋan - a míhu ikílu

「猫(9)」 S(9) -「光る」 - 基F 「目(4)」 「夜」

78b) mĭhu ga púsi ganaŋana ikĭlu 「夜，猫の目が光る」

míhu gá púsi ga - náŋan - a ikílu

「目(4)」 属(4) 「猫(9)」 S(4) -「光る」 - 基F 「夜」

例75～78のaは「所有者」を主語とした場合，bは「所有物」を主語とした場合である。aのような表現が可能なのは，所有物が不可譲渡名詞である場合に限られるが，以下のような場合には容認度にゆれがある。

79) ? né mói kípini pímbulu dʒâŋgu 「私は私の鼻から鼻ピアスが外れた」

né n - bó - i(tí) kípini pa-ímbulu dʒáŋgu

「私」 S1sg -「外れる」- 完F 「鼻ピアス(7)」 「鼻から(16)」 「私の(9)」

80) ? né mɔpwiki íŋgobu 「私は（身体に巻いた）布がほどけた」

né n - bɔ́pɔk - i(tí) íŋgobu

「私」 S1sg - 「ほどける」 - 完F 「布(9)」

cf.80') * gwɛ gubɔpwiki íŋgobu 〔君は布がほどけた〕

ピアス，腰につけているビーズ，身体に巻いている布などのように，常に身につけている物に関しては，所有者を主語とした表現が用いられることもある。ただし，所有者が1人称単数の場合に限られる。また，79，80 を非文とする人もある。つまり，「不可譲渡」として捉えられる範囲には，核となる部分と周辺的な部分があり，周辺的なものに対する捉えかたに個人差がある，と言える。核となるのは，身体，身体の部分，分泌物，排泄物などで，これらは誰もが「不可譲渡」として捉えている。従って主語になる所有者に制限はない。それに対して，常に身につけているものというのは，周辺的なものである。周辺的であるから，これが「不可譲渡」と捉えられる場合であっても，主語になる所有者には制限がある。

be 動詞文では，所有者を主語にできるのは，所有物が不可譲渡名詞であるだけでなく，表わされている様態が所有者の様態に直接係わっている場合に限られる。

81a) mágolu gâkɛ gabí malâsu 「彼の足は長い」

mágolu gakɛ ga -bé - i(tí) malásu

「足(6)」 「彼の(6)」 S(6) - be - 完F 「長い(6)」

81b) dʒubí ṇdâsu mágolu 「彼は足が長い」

dʒu -bé- i(tí) ṇdásu mágolu

S3sg - be - 完F 「長い(3sg)」 「足(6)」

cf. 81c) dʒubí ṇdâsu 「彼は背が高い」

dʒu -bé- i(tí) ṇdásu

S3sg - be - 完F 「長い(3sg)」

81d) * dʒubí ṇdâsu máboku 〔彼は手が長い〕

dʒu -bé- i(tí) ṇdásu máboku

S3sg - be - 完F 「長い(3sg)」 「手(6)」

81e) * dʒubí ṇdâsu mádʒɔndzu 〔彼女は髪の毛が長い〕

dʒu -bé- i(tí) ṇdásu mádʒɔndzu

S3sg - be - 完F 「長い(3sg)」 「髪(6)」

「足が長い」ことは「彼が背が高い」ことに直接係わっているが，「手が長い」ことや「髪の毛が長い」ことは，「彼」の背の高さとは関係ない。従って，「足」の場合は所有者である「彼」を主語にすることができるが，同じく不可譲渡名詞であっても「手」や「髪」の場合には非文になる。

6.2.4.1.2. 適用形を用いた表現

適用形を用いて所有を表わすこともある。

82) ńkɔŋgu gugúhabukí paṇûmba lísɔ 「昨日木が君の家に倒れた」

ńkɔŋgu gu - a - gú - hábuk- il - i (ti) paṇúmba lisú

「木 (3)」 S(3) - 過T - O2sg - 「落ちる」 - AP- 完F 「家に(16)」 「昨日」

82') ńkɔŋgu gwahábukí paṇúmba dʒâkɔ lísɔ 「昨日木が君の家に倒れた」

ńkɔŋgu gu - a - hábuk - il - i (ti) paṇúmba dʒákɔ lisú

「木 (3)」 S(3) - 過T - 「落ちる」 - AP - 完F 「家に(16)」 「君の(9)」 「昨日」

83) dʒunéŋganakaki ligâli 「彼は私の車を修理した」/「私の代わりに修理した」

dʒu - n - léŋganake - il - i (tí) ligáli

S3sg - O1sg- 「直す」 - AP - 完F 「車(5)」

83') dʒuléŋganaki ligáli ljâŋgu 「彼は私の車を修理した」

dʒu - léŋganake - i (tí) ligáli ljáŋgu

S3sg - 「直す」 - 完F 「車(5)」 「私の(5)」

上記は，適用目的語が「受益者」や「被害者」を表わす例である。従って，これらは厳密に言えば，「所有者」を表わしているのではなく，「被害や利益などの影響を受けた者」を表わしているのである。しかしながら，一般的に「所有者」として理解されることが多い。このような例については 5.4.4.2.で既に述べたが，ここでもう一度，適用形によって

所有者を表わすことが可能な場合についてまとめる。

例 82' [3]と 83'は所有形容詞を用いた一般的な所有表現である。これらは，起こった事態の描写であって，それによる「影響」という点についてはニュートラルである。それに対して，適用形を用いた例 82 と 83 は，起こった事態によって，適用目的語が表わしている所有者が影響を受けた，ということに焦点がある。所有者が大した影響を受けない場合には，このような表現は使えない。

また，所有者，所有物になり得る語にも制限がある。所有者となり得るのは人物のみで，しかもO辞として動詞内に取り込めなければならない。所有物となり得る名詞は，家や車といった所有者にとって「影響力のあるもの」に限られる。さらに，適用目的語で所有者を表わすのは，動作主が人物以外の場合が多い。動作主が人物である例 83 の場合は，「彼が私の代わりに車を修理した」という解釈もできる。車を修理することを仕事としている「私」の代わりに「彼」が修理したのであれば，車は「私」の所有物ではない。これに対して動作者が人物でない例 82 のほうは所有表現以外の解釈はできない。

6.2.4.2. 命令，勧誘，助言など

命令，勧誘，助言などの表現には，肯定の内容であれば，接続法あるいは希求法が用いられる。これらの表現にもテンスの対立があり，「現在」に対する命令，勧誘，助言と「未来」に対する命令，勧誘，助言では活用形が使い分けられる。否定の内容の場合には，否定接続法あるいは禁止法が用いられる。この場合にはテンスの対立はない。それぞれの活用形の詳細と例文は 5.6.「動詞の活用」ですでに述べているので，ここでは省略する。

[3] 82'も適用形であるが，これは「～のほうへ向かって」という到達点を表わす用法である。

6.3. 複文

本論文で「複文」として扱うのは，基本的には「２つ以上の節から構成されている文」である。しかしながら，動詞ひとつから成る節が存在するため，それが複文なのか複合活用形なのか，一見わかりにくい場合がある。そこでもう一度，複文として扱う領域と，複合活用形として扱う領域についてまとめてみる。

複合活用形には，「be 動詞＋一般動詞」，「一般動詞＋一般動詞」，「動詞補助詞＋一般動詞」，の３とおりがある（5.6.5.参照）。「動詞補助詞＋一般動詞」は一方が動詞ではないので，これは複文ではない。また，be 動詞は一般動詞と同じ構造をしているが，単独で節をつくることはできないので，「be 動詞＋一般動詞」から成る複合活用形も複文ではない。境界が曖昧なのは「一般動詞＋一般動詞」である。このうち，後ろ側の一般動詞が不定形で現われ，前方の動詞の目的語あるいは補語として機能している場合，この不定形は動詞というよりも名詞として機能をしている。これも複文とは言えない。これは不定形が名詞的機能をしているのであって，このような場合は複合活用形とも言えないが，テンス・アスペクト・ムードに係わるものに関しては，複合活用形の節 5.6.5.で扱った。

「～しそうになる」という表現に用いられる「-ka ＋ 一般動詞現在希求形」(5.6.5.2.1.)や，「～しなければならない」という表現に用いられる「-palik-＋一般動詞現在希求形」(5.6.5.2.2.）は，後半部分が名詞節として機能しており，構造的には複文として扱うべきものである。しかし，いずれも前半の動詞は，常に他の一般動詞を名詞節として伴なう必要があり，単独で現われることができない。つまりこれらの動詞は一般動詞であるが，すでに機能的にも統語的にも助動詞化していると言える。そこでこれらも複合活用形の章で扱った。

従って，本論文で「複文」として扱うのは，「２つ以上の節から成る文のうち，一方の動詞が助動詞化しているものを除いたもの」ということになる。れまでにも，活用形の用例として，複文の例をあげているが，ここでは複文を，節と節の係わり方によって分類し，検討する。複文を構成する節と節の関係には，主節と従属節，等位節の並列の２とおりがある。さらに主節と従属節の関係は，主節に対する従属節の機能によって，名詞節，関係節，副詞節に分けられる。

ここでは，構成している節の相互関係から複文を「主従複文」と「並列複文」に分け，さらに従属節については主節に対する機能別に分けて，それぞれの形態，および主節との係わり方について述べる。また，複文でのみ用いられる活用形についてはここで説明する。

6.3.1. 従属節

動詞の構造自体には，主節で用いられる場合と従属節で用いられる場合の間に違いはな

いが，活用形の現われ方や語末音節が脱落する環境などに違いがある。活用形については，主節では，単純過去形，単純未来形，移動未来形は，後続語を伴なわずに用いることができないが，従属節では後続語がなくてもこれらの活用形を用いることが可能である。また主節の場合，動詞の語末音節の脱落は後続語がある場合にしか起こらず（5.5.3.7.参照），この脱落は必須である。しかしながら従属節では，この脱落は後続語がない場合でも自由変異として起こる。後続語がある場合には主節と同じく脱落は必須である。

6.3.1.1. 名詞節

名詞節の表示は特にない。主節と同じ形で現われ，主節の後ろに位置する。文法的には名詞節が主語となる場合も考えられそうだが，実際にはそういった例は聞かれない。また，例5，6が示すように，間接話法での時制の一致はない。

1) maɲǐti　dʒwahika　lísu　「私は昨日彼が来たことを知っている」

完了現在 ＋ 単純過去

n - máɲ -ití　dʒu- a - hík - a(dʒɛ)　lisú

S1sg-「知る」- 完F　S3sg- 過T-「着く」- 非完F　「昨日」

2) né ɲégwití　nugúketaŋganá　l̪ilɛ　「私は君といつ会ったか忘れた」

完了現在 ＋ 単純過去

né　n-　dʒégw - ití　n - a - gu - kétaŋgan - a(dʒɛ)　l̪ilɛ

「私」　S1sg-「忘れる」- 完F　S1sg- 過T- O2sg - 「出合う」 - 非完F　「いつ」

3) maɲǐti　dʒwídʒɛndá kwa　「彼がどこへ行くのか知っている」

完了現在 ＋ 単純未来

n - máɲ - ití　dʒu - í - dʒénd - a(dʒɛ)　kwakɔ́

S1sg-「知る」- 完了F　S3sg - 未T -「行く」- 非完F　「どこ」

4) né ŋgase máɲǐti　mwiti　dʒudʒendi au ŋga dʒudʒendɛ

完了現在 ＋ 「 mwiti ＋ 現在接続 」

「私は彼が行くのか行かないのか知らない」

né　ŋgase　n-　máɲ - ití

「私」　Neg　S1sg-「知る」- 完F

mwiti　dʒu - dʒénd - i　au　ŋga　dʒu - dʒénd- i

Aux　S3sg -「行く」- 接F　「or」　Neg　S3sg -「行く」- 接F

5) dʒwapwaga　dʒupa̱la　kitâbu　「彼は本が必要だと言った」

単純過去 ＋ 単純現在

dʒu - a - pwág - a(dʒɛ)　dʒu - pa̱l - a　kitábu

S3sg - 過 T -「言う」 - 非完 F　S3sg -「要る」- 基 F　「本(7)」

6) dʒwambwagila　nundẹ̱tila　kitâbu　「彼は私に本を持ってこいと言った」

単純過去 ＋ 現在希求

dʒu - a - n- pwágil - a(dʒɛ)　n - mu - lẹ̱til - a(dʒɛ́)　kitábu

S3sg - 過 T- O1sg-「～に言う」-非完 F　S1sg - O3sg -「～に持って行く」- 希 F　「本(7)」

7) tupa̱la　gukúlágalja　「我々は君に雑草刈りをやって欲しい」

単純現在 ＋ 現在希求

tu - pa̱l - a　gu - kúlagalil - a(dʒɛ́)

S1pl -「要る，望む」- 基 F　S2sg -「雑草を刈る」- 希 F

8) dʒugúbeka　gwɛ　gubɔpulja　ṇtíbi　「彼は君にロープを放させた」

単純過去 ＋ 現在希求

dʒu - u - gu - bék - a(dʒɛ)　gwɛ　gu - bɔ́pulɛl- a(dʒɛ́)　ṇtíbi

S3sg - 過 T- O2sg-「置く」- 非完 F　「君」　S2sg -「放す」 - 希 F　「ロープ(3)」

6.3.1.2. 関係節

関係節は「 関係辞＋直説法の各活用形 」という構造からなり，被修飾名詞の後ろに位置する。関係節には直説法の活用形しか用いることができない。関係辞は「 代名詞接頭辞－V 」という構造から成る（4.2.参照）。代名詞接頭辞は被修飾名詞が属している名詞クラスに呼応し，具体的には表 1 に示した形で現われる。場所クラス（16～18 クラス）に呼応する関係辞は，場所だけではなく時を修飾する場合にも用いられる。スワヒリ語(Ashton 1944)をはじめ，関係辞が接辞として動詞の中に組み込まれる言語もあるが，マテンゴ語の場合は独立語である。これは，関係辞の長母音が 3 音節以上から成る動詞に後続されても短母音化していないことに裏付けられる。

関係辞は，「これは何ですか？」といった質問に対して「それは～です」と答える場合に繋辞のように用いられることもある。その場合は，答えとなる名詞のクラスに呼応した関係辞が用いられる（p253，例 61 参照)。

＜表１：各名詞クラスの関係辞＞

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	20
dʒo̱	ba̱	go̱	dʒe̱	le̱	ga̱	se̱	hje̱	dʒe̱	je̱	lo̱	ka̱	to̱	go̱	ko̱	pa̱	ko̱	mo̱	go̱

9) núm̩bwêni mundu dʒó̱ dʒuṭúbo̱la twêŋga

完了過去 ＋ 関係辞 ＋ 単純現在 （主語を修飾）

「私は我々を教えている人に会った」

n - a - mu - bón - iti mundu dʒo̱ dʒu-tú - bó̱l - a twéŋga

S1sg- 過 T - O3sg-「会う」-完 F 「人(1)」 R(1) S3sg - O1pl -「教える」- 基 F 「我々」

10) núm̩bwêni mundú dʒo̱ nám̩pekia kitâbu

完了過去 ＋ 関係辞 ＋ 単純未来 （目的語を修飾）

「私は私が本をあげるつもりの人に会った」

n - a - mu - bón - iti mundu

S1sg - 過 T - O3sg -「会う」- 完 F 「人(1)」

dʒo̱ n - í - mu - péke - a(dʒɛ) kitábu

R(1) S1sg - 未 T- O3sg -「与える」- 非完 F 「本(7)」

11) núm̩bwêni mundú dʒo̱ gwakasula íŋgobu dʒâkɛ

完了過去 ＋ 関係辞 ＋ 単純過去 （被修飾語を修飾）

「私は君が服を破った人に会った」

n - a - mu - bón - iti mundu

S1sg - 過 T - O3sg -「会う」- 完 F 「人(1)」

dʒo̱ gu - a - kásul - a(dʒɛ) íŋgobu dʒákɛ

R(1) S1sg- 過 T-「破る」- 非完 F 「服(9)」 「彼の(9)」

12) lúha̱gí le̱ twabómbiti lwakádʒwiki 「我々が作った皿が割れた」

名詞 ＋ 関係辞 ＋ 完了過去 ＋ 完了過去 （目的語を修飾）

lúha̱gí le̱ tu - a - bómb - iti lu - a - kádʒuk - iti

「皿(11)」 R(11) S1pl - 過 T-「作る」- 完 F S(11)- 過 T-「割れる」 - 完 F

13) tudʒibôiti míkɔŋgu dʒe̱ dʒihábwiki páhɛ 「我々は倒れた木々を動かした」

完了現在 ＋ 関係辞 ＋ 完了現在 （主語を修飾）

tu - dʒi - bó - ití míkɔŋgu dʒe̱ dʒi - hábuk - ití pahí

S1pl - O(4) -「動かす」- 完F 「木(4)」 R(4) S(4) -「落ちる」- 完F 「下」

14) mba̱la kúkumaɲa ko̱ dʒutâma 「私は彼が住んでいるところを知りたい」

単純現在 ＋関係辞 ＋ 単純現在 （文修飾語を修飾）

n - pa̱l - a kú - ku - máɲ- a

S1sg-「要る，望む」- 基F 不定形「それ(17)を知る」

(mahala) ko̱ dʒu - tám - a

(「場所(17)」) R(17) S3sg -「住む」- 基F

15) musi góngŏne pa̱ nabɛlɛkika nêŋga 「この集落は私が生まれた場所です」

名詞句 ＋ 関係辞 ＋ 単純過去 （文修飾語を修飾）

musí gɔngonɛ (mahala) pa̱ n - a - bélɛkik - a(dʒɛ) néŋga

「集落(3)」 「この(3)」 (「場所(16)」) R (16) S1sg- 過T-「生まれる」- 非完F 「私」

cf. 15') musi góŋgŏne (musi) go̱ nabɛlíkika nêŋga

(「集落(3)」) R(3)

「この集落は私が生まれた集落です。」

16) ŋgasɛ mánĭti se̱ dʒupa̱la 「私は彼が必要なものを知らない」

完了現在 ＋ 関係辞 ＋ 単純現在 （目的語を修飾）

ŋgasɛ n - máɲ - ití (sindu) se̱ dʒu - pa̱l - a

Neg. S1sg-「知る」- 完F (「物(7)」) R(7) S3sg-「要る」- 基F

例14～16のように，先行名詞が明示されなくても文脈や関係辞の文法呼応からそれが何であるか判断がつく場合には，それらは省略される。例14と15ではmahala「場所」，例16ではsindu「物」が省略されている。例15'は15と似ているが，関係辞が3クラスの名詞に呼応していることから，前に出てきているmusi「集落(5)」がここで省略されていると考えられる。

6.3.1.3. 副詞節

副詞節には，主節が表わしている事態の，時や場所，条件，目的，理由，結果，様態，を表わすものがある。

6.3.1.3.1. 時，場所

「時」と「場所」を表わす副詞節は，he，pa̱，ko̱，koni によって表示される。それぞれ以下のような意味を表わす。

he　：～したとき，～するときといった「時」を表わす。

pa̱　：「時，場所」を表わす。時を表わす場合には heとの間に違いはない。場所を表わす場合は，発話場所から近いところの場合に用いられる。

ko̱　：「場所」を表わす。pa̱に比べて発話場所から遠いニュアンスがある。

koní　：「～の間」という幅のある時間を表わす。

he，pa̱，ko̱ には，主節の活用形に応じて単純過去形，単純現在形，単純未来形が続く。koníには，主節の活用形にかかわらず，単純現在現在，あるいは同時形が用いられる。これらはどちらを用いても意味に差はない。

17) hé　dʒwahika　lísɔ　dʒwambwágílɛ　「昨日彼が来たとき，彼は私に伝えた」

he＋　単純過去　＋　完了過去

he　dʒu - a　-hík - a(dʒɛ)　lisu　dʒu - a　- n -　pwágil - iti

「時」　S1sg- 過 T-「着く」-非完 F　「昨日」　S3sg - 過 T -　O1sg -「言う」　-　完 F

18) pa̱　níhika　kábete　mbáka　nágupekěɛ「今度私が来たとき，君にあげる」

pa̱＋ 単純未来　＋「動詞補助 ＋ 未来接続」

pa̱　n - í-　hík　- a(dʒɛ)　kábete　mbáka　n　- í -　gu-　péke　-　i

「時」　S1pl-未 T-「着く」- 非完 F　「再び」　Aux　S1sg - 未 T- O2sg -「あげる」- 接 F

19) pa̱　twakula　kílebi　ŋgasé　dʒwabí

pa̱ ＋　単純過去　＋　完了過去

「我々が食事をしていたとき /食事をしていたここに彼はいなかった」

pa̱　tu - a　-　kúl -　a(dʒɛ)　kílebi　ŋgasé　dʒu - a　- bé - i(ti)

「時，ところ」　S1pl - 過 T-「食べる」-非完 F　「食事(7)」　Neg.　S3sg - 過 T-　Be -　完 F

20) kọ̱ twahɛnga líhɛŋgu dʒwaɲa sâi

kọ̱ ＋ 単純過去 ＋ 単純過去

「我々が働いているところで彼はお茶を飲んでいた」

kọ̱ tu- a -héng -a(dʒɛ) líhɛŋgu dʒu - a - ɲé - a(dʒɛ) sái

「ところ」 S1pl- 過 T-「働く」- 非完 F 「仕事(5)」 S3sg - 過 T-「飲む」- 非完 F 「お茶(9)」

21) dʒukúlja kílebi sâki koní dʒupelakane ɲêmbu

単純現在 ＋ koni ＋ 単純現在

「彼は音楽を聴きながら食事をする」

dʒu - kúle - a kílebi saki koní dʒu - pélakane(l- a) ɲémbu

S3sg-「食べる」- 基 F 「食事(7) 「彼の(7)」「～の間」 S3sg - 「聴く」 - 基 F 「歌(9)」

22) dʒwasɔma kitâbu koní dʒuloŋgela na dʒwɔ̃mbɛ

単純過去 ＋ koni ＋ 単純現在

「彼は彼女と話をしながら本を読んでいた」

dʒu- a- sɔ́m - a(dʒɛ) kitábu koni dʒu - lóŋgel - a na dʒwɔmbí

S3sg - 過 T-「読む」- 非完 F 「本(7)」 「～の間」 S3sg -「話す」 - 基 F 随伴 「彼女」

「～の後で」,「～の前に」のように，節と節の時間的な前後関係が問題になる場合には以下のように表現される。

23) lɛgĩna andɔ́ŋguli sutêla kúbɛlakɛka「レギーナはステラより先に産まれた」

完了過去 ＋ 不定形

lɛgĩna a - a - mu - lɔ́ŋgɔl - i(ti) sutéla kúbɛlakɛka

「レギーナ」 S3sg - 過 T - O3sg. -「先行する」- 完 F 「ステラ」 不定形「生れる」

24) he mọ̱kitá ŋgúlítɛ

he＋当日過去＋ 完了現在

「私は食事を食べた後，出かけた＝私が出かけたとき，私は食べ終わっていた」

he n - bọ́k - it - á(dʒɛ) n - kúl - ití

「時」 S1sg-「出かける」- PreF- 非完 F S1sg -「食べる」- 完 F

6.3.1.3.2. 条件

条件は，今後のことや事実を知らないことに対する「もし～なら」という仮定の条件と，「もし～であったなら」という，すでに起こってしまったことに対して事実と反対のことを仮定する反実仮想条件に分けられる。条件を表わす従属節では，「もしも」を表わすaná が動詞の前に置かれるが，仮想の場合には省略されることが多い。aná の代わりに「時」を表わす hé が用いられることもある。

6.3.1.3.2.1. 仮定条件

未来のことや別の場所で起こっていることなど，実際の状態がわからないことに対する仮定条件を表わす従属節には，主節の活用形に係わらず完了現在形が用いられる。その前には必ずaná あるいは hé が置かれる。

25) aná dʒudʒímwikí, dʒuhêŋga líhɛŋgu
ana ＋ 完了現在 ＋ 単純現在
「もし彼が元気なら今頃働いているだろう（実際は知らない）」

aná	dʒu - dʒímuk - ití	dʒu - héŋg - a	líhɛŋgu
「もし」	S3sg -「元気である」- 完F	S3sg -「働く」- 基F	「仕事(5)」

26) aná dʒikúniki íhjula kilą̂bɔ, ŋga nidʒênda
ana ＋ 完了現在 ＋ 否定形単純未来
「もし雨が降れば私は行かない」

aná	dʒi - kúnik- ití	íhjula	kilą́bu	ŋga	n - i - dʒénd - a
「もし」	S(9) -「降る」- 完F	「雨(9)」	「明日」	Neg	S1sg - 未T-「行く」- 基F

否定の仮定条件は，完了現在形の否定形で表わされる。完了現在形の代わりに不定形を用いることも可能である。従属節の動詞の前には必ずaná が置かれる。

27) aná ŋgase dʒikúniki íhjula kilą̂bɔ, mbáka ɲénde
ana ＋ 否定形完了現在 ＋ 「mbaka ＋現在接続」
「もし明日雨が降らなかったら私は行く」

aná	ŋgase	dʒi- kúnik-ití	íhjula	kilą́bu,	mbáka	n- dʒénd - i
「もし」	Neg	S(9)-「降る」-完F	「雨(9)」	「明日」	Aux	S1sg -「行く」- 接F

＝ 27') aná ŋga kúkuna íhjula kilâbɔ mbáka ɲénde
ana ＋ 否定不定形 ＋ 「mbaka ＋現在接続」

6.3.1.3.2.2. 反実仮想条件

今すでに起こっていることやこれまでに起こってしまったことに対して，事実とは異なる想定を条件にする場合には「仮想形」が用いられる。これは複文にしか用いられない活用形で，以下のような構造をしている。

仮想形：「S辞 ― áka（仮想時制辞）―（O辞―） 語基 ― iti（完了過去語尾）」

「仮想形」は現在に関する仮想でも過去に関する仮想でも同じ形で用いられる。仮定条件のように aná を前に置くこともあるが必須ではない。

「仮想形」を従属節にとる場合の主節は，肯定の内容であれば以下のような「反実仮想を表わす複合活用形」が用いられる。

仮想複合活用形：「 -akaba ＋ 単純現在形もしくは完了現在形 」

この複合活用形は仮想形の従属節を伴なった形でしか現われない。-akabaは，同時時制辞と希求語尾を付けた be 動詞の「同時形」である（同時形については 6.3.1.4.で述べる）。後ろに続く動詞の活用形は，「現在」に関する継続的な行為の仮想の場合には単純現在形が用いられ，状態や瞬間的な行為，または「過去」に関する仮想の場合には完了現在形が用いられる。否定の内容の場合には，従属節と同じ仮想形が用いられ，動詞の前に否定語を置く。

28) dʒwákadʒimwĩki dʒwakabá dʒuhɛŋga líhɛŋgu

仮想形 ＋ 「 −akaba ＋ 単純現在形」

「もし彼が元気だったなら，彼は（今頃）仕事をしていただろうに」

dʒu-áka - dʒímuk - iti　dʒu- aka -bé- a(dʒɛ́)　dʒu - héŋg - a　líhɛŋgu

S3sg. - 仮T -「元気である」-完F　S3sg - 同T - be - 希F　S3sg -「働く」- 基F　「仕事(5)」

29) hé nakabí nu lipîdʒa, nakabá hẽmĩli sandalûa

仮想形 ＋ 「 −akaba ＋ 完了現在形 」

「もしお金があったら，蚊帳を買うんだったのになあ」

hé　n - áka - bé -i(ti)　na　lupîdʒa,

「もし」　S1pg- 仮T - be - 完F　随伴　「お金(11)」

n - aka- bé - a(dʒɛ́)　n - hémɛl -ití　sandalúa

S1pg - 同T - be - 希F　S1pg-「買う」- 完F　「蚊帳(7)」

30) gúkumbǫ̰liti dʒwakaba dʒuhwés̰iti ṇtihâni

仮想形 ＋ 「 -akaba ＋ 完了現在形 」

「もし君が彼に教えていたなら彼は試験に合格できたのに」

gu -áka - mu - bǫ́l - iti

S2sg - 仮T - O3sg - 「教える」 - 完F

dʒu - aka - bé- a(dʒé) dʒu - hwés - ití ṇtiháni

S3sg - 同T - be - 希F S3sg - 「できる」 - 完F 「試験(3)」

31) aná dʒwakamaɲîti dʒwakaba dʒubúdʒ̰iti kuɲumba

ana＋ 仮想形 ＋ 「 -akaba ＋ 完了現在形 」

「彼女がもし知っていたら，家に帰っていただろうに」

aná dʒu - áka - máɲ - ití

「もし」 S3sg - 仮T - 「知る」 - 完F

dʒu - aka- bé -a(dʒé) dʒu - búdʒ - ití kuɲúmba

S3sg - 同T - be - 希F S3sg - 「帰る」 - 完F 「家へ(17)」

32) dʒákakuníki sádʒɛnu, ŋga nákabí pânɛ

仮想形 ＋ 否定語 ＋ 仮想形

「もし今雨が降っていたら，私はここにはいないだろう」

dʒi- áka - kúnuk - iti sádʒɛnu, ŋga n - áka - bé - i(ti) pánɛ

S(9) - 仮T - 「降る」 - 完F 「今」 Neg. S1sg - 仮T - be - 完F 「ここ」

33) aná dʒakakuníki íhjula lísɔ ŋga nákahikití kuɲúmba dʒínɔ

ana＋ 仮想形 ＋ 否定語 ＋ 仮想形

「もし昨日雨が降っていたら，私は君の家に行かなかったのに」

aná dʒi - áka - kúnik - iti íhjula lisú

「もし」 S(9) - 仮T - 「降る」 - 完F 「雨(9)」 「昨日」

ŋga n - áka - hík - ití kuɲúmba dʒínɔ

Neg S1sg - 仮T - 「来る」 - 完F 「家へ(17)」 「君の(9)」

否定の仮想条件を表わす場合も，肯定の場合と同じく反実仮想形を用いる。否定形にするためには，否定語のかわりに，動詞 -lɛm-「～ではない」を用いるのが一般的である。従属節の動詞の前の aná は必須ではない。主節は肯定条件の場合と同じく，仮想の複合

活用形が用いられる。

34) aná gwákalɛmíti kúhika lísɔ, né ŋga nákatɔtúkilɛ
ana＋ 仮想形 ＋ 否定語 ＋ 仮想形
「昨日君がこなければ，私は疲れなかったのに」
aná gu - áka - lém - iti kúhika lisú
「もし」 S2sg -仮T -「でない」- 完F 不定形「来る」 「昨日」
né ŋga n - áka - tɔtukɛl - iti
「私」 Neg S1sg- 仮T -「疲れる」- 完F

35) aná ljakalémiti kúhalabika ligâli, nakaba nuguhíndakílɛ
ana ＋ -lɛm- の仮想形 ＋ 「 -akaba ＋ 完了現在形 」
「もし車が壊れていなければ，君を送って行くのだが/ 行ったのだが」
aná li - áka- lém - iti kúhalabika ligáli
「もし」 S(5) - 仮T-「でない」-完F 不定形「壊れる」 「車(5)」
n - aka - be - a(dʒé) n - gu - híndakil-ití
S1sg - 同T - Be - 希F S1s - O2sg -「送る」 - 完F

6.3.1.3.3. 目的

6.3.1.3.3.1. 肯定目的

肯定の目的を表わす従属節には，接続法と希求法が用いられる。目的を表わす従属節を表示する語に，「～のために」を意味する magambu があるが，これは必須ではなく，多くの場合省略される。主節と従属節の主語が同じ場合には，従属節に不定形を用いることもできる。

36) tuhíkití kutandzanía tukwéli kilimandʒálɔ
完了現在形 ＋ 現在接続形
「我々はキリマンジャロに登るためにタンザニアに来た」
tu - hík - ití kutandzanía tu - kwél - i kilimandʒálɔ
S1pl-「来る」-完F 「タンザニア～(17)」 S1pl-「登る」- 接F 「キリマンジャロ」

＝36') tuhíkití kutandzania kúkwɛla kilimandʒálɔ
不定形「登る」

37) dʒuhɛŋga líhɛŋgu gwihémala íŋgobu

単純現在形 ＋ 未来希求形

「彼は君が服を買えるように働いている」

dʒu- héŋg - a líhɛŋgu gu - í - hémɛl - a(dʒé) íŋgobu

S3sg -「働く」- 基F 「仕事(5)」 S2sg - 未T -「買う」- 希F 「服(9/10)」

6.3.1.3.3.2. 否定目的

「～しないために」という否定内容の目的を表わすためには否定接続形が用いられる。肯定の場合と同じく，magambu が用いられる場合もあるが，必須ではない。

38) hwɛ́ti íŋgobu híŋgi (magambu) nibɔna kípɛpu

完了現在形 ＋ 否定接続形

「寒くないようにたくさん服を着ている」

n - hwát - ití íŋgobu híŋgi

S1sg -「着る」- 完F 「服(10)」 「たくさん(10)」

(magambu) n - i - bón - á kípɛpu

(「～するために」) S1sg - 否T-「感じる」- 否F 「寒さ(7)」

39) hɛ̃ŋga baná ba bíibɔna índzala

単純現在形 ＋ 否定接続形

「子供がお腹をすかさないよう私は働いている」

n - héŋg - a bána bá(ŋgu) ba - i - i - bón - á índzala

S1sg-「働く」-基F 「子供(2)」 「私の(2)」 S3pl - 否T- O (10)-「感じる」- 否F 「飢え(10)」

6.3.1.3.4. 理由

ndábaは「理由」を表わす９クラスの名詞であるが，従属節の前に位置すると，「～なので」という理由を表わす前置詞として機能をする。従属節には直説法の各活用形が用いられる。

40) hwɛ́ti íŋgobu híŋgi, ndába mbɔna kípɛpu「寒いので服をたくさん着ている」

完了現在形 ＋ ndába＋ 単純現在形

n - hwát - ití íŋgobu híŋgi ndába n - bón - a kípɛpu

S1sg-「着る」-完F 「服(10)」 「たくさん(10)」「～なので」 S1sg-「感じる」-基F 「寒さ(7)」

41) dʒuhwɛsiti ṇtihâni, ndába gumbɔ̰litɛ

完了現在形 ＋ ndába＋ 完了過去形

「君が教えたので，彼は試験に合格した」

dʒu - hwɛ́s - ití ṇtiháni ndába gu - a - mu - bɔ̰l - iti

S3sg-「できる」-完F 「試験(3)」 「～なので」 S2sg - 過T- O3sg-「教える」- 完F

6.3.1.3.5. 結果

主節の表わしている内容の結果を表わす場合，従属節には，主節と同じ活用形が用いられる。通常は完了現在形あるいは完了過去形である。従属節を表示する語はない。

42) hɛ̃ŋgiti líhɛŋgu, mbatikí lupídʒa 「私は働いてお金を得た」

完了現在形 ＋ 完了現在形

n - hɛ́ŋg - ití líhɛŋgu n - pát - ití lupídʒa

S1sg-「働く」- 完F 「仕事(5)」 S1sg -「得る」-完F 「お金(11)」

cf. 42') hɛ̃ŋgiti líhɛŋgu nu kúpata lupídʒa

等位 不定形「得る」

43) nabútwíki, nakósiti libâsi 「走ったがバスに乗り遅れた」

完了過去形 ＋ 完了過去形

n - a - bútuk - iti n - a - kós - iti libási

S1sg - 過T - 「走る」- 完F S1sg - 過T -「失敗する」- 完F 「バス(5)」

主節と従属節の主語が同じ場合で，さらに従属節が表わす結果が順当なものである場合，例42'のように「等位接続語 na＋不定形」という形で表わされることもある。こうなると，「結果を表わす副詞節」と「等位節の並列」は意味的にも似ている上，構造的にも違いがなくなる。後者はそれぞれの節の間に因果関係がないのに対して，前者は後ろに位置する節が表わす事態は先行する節の事態に起因している，という違いがあるはずだが，例 42'のような場合は，不定形が表わしているものは，主節と連続して起こった事態であって，必ずしも結果ではない。つまり同じ内容でも，na＋不定形で表わされる場合には，２つの節は主従の関係というよりも，事態の起こった順に並列されている等位の節として捉えられていると考えられる。

否定内容の結果は，否定形の完了過去もしくは完了現在形を用いる。また従属節に不定

形を用いることもできる。ただし，これは否定を不定形で表わしているだけで，肯定結果の場合のように等位の節として捉えられている訳ではない。

44) dʒwahia sindú sĕlá, né ŋgasé nikibwênɛ

単純過去形 ＋ 否定完了現在形

「彼がそれを隠したので私は見つけられなかった」

dʒu - a - hí - a(dʒɛ) síndu sela né ŋgasé n - ki - bón - ití

S3sg - 過 T-「隠す」- 非完 F 「物(7)」 「その(7)」 「私」 Neg S1sg - O(7)-「見る」- 完 F

= 44') dʒwahijá sindú sĕlá, né ŋga kúkibɔna

cf. 44") dʒwahia síndu séla, né nikibóna

単純過去形 ＋ 否定接続形

「彼は私に見つからないようにそれを隠した」

45) dʒwahábwîki múŋkɔŋgu, ŋgasɛ dʒupátiki líŋeba

完了過去形 ＋ 否定完了現在形

「彼は木から落ちたがけがをしなかった」

dʒu - a - hábuk - iti muŋkɔŋgu ŋgasɛ dʒu - pát - ití líŋeba

S3sg - 過 T-「落ちる」-完 F 「木から(18)」 Neg. S3sg -「得る」- 完 F 「傷(5)」

6.3.1.3.6. 様態

「どのように」という様態を示す従属節には希求法の活用形が用いられる。従属節の前には ŋgáti he を置く。ŋgáti は「～のような」を意味する前置詞である。

46) guhéŋgɛ ŋgáti he nuguláŋgja 「私があなたに示したように働きなさい」

現在接続形 ＋ŋgáti he＋ 完了希求形

gu - héŋg - i ŋgáti he n - gu - láŋgi - a(dʒé)

S2sg -「働く」- 接 F 「～のように」 S1sg - O2sg -「示す」- 希 F

47) dʒumbwágilá ŋgatí he guṇdágalakja

当日過去形 ＋ ŋgáti he＋ 現在希求形

「彼は君が頼んだとおりに私に伝えた」

dʒu - n - pwágil - á(dʒɛ) ŋgatí he gu - mu - lágalakil - a(dʒɛ́)
S3sg - O1sg-「～に伝える」- 非完F 「～のように」 S2sg - O3sg -「注文する」 - 希F

6.3.1.4. 時相節

時相節は，「～しているところを」あるいは「～の時に」のように，主節の事態と同時に起きている状態を表わす従属節で，活用形には「同時形」が用いられる。これは複文でのみ用いられる活用形で以下のように構成される。

同時形：「S辞 ― aka（同時時制辞）―（O辞―） 語基― adʒɛ́（希求語尾）」

この従属節は，例48のように形容詞的機能をすることも，例49，50のように副詞的機能をすることもある。

48) núm̩bɔna tomu dʒwakasámbilǎdʒɛ 「私はトムが泳いでいるのを見た」
単純過去形 ＋ 同時形
n - a - mu - bɔ́n - a(dʒɛ) tomu dʒu - aka - sámbil - adʒɛ́
S1sg - 過T- O3sg-「見る」- 非完F 「トム」 S3sg - 同T- 「泳ぐ」- 希F

49) dʒukûlja dʒwakasɔ́ma kitâbu 「彼は本を読みながら食べる」
単純現在形 ＋ 同時形
dʒu - kúle - a dʒu - aka - sɔ́m - a(dʒɛ́) kitábu
S3sg-「食べる」- 基F S3sg - 同T -「読む」- 希F 「本(7)」

50) hwâtití kitêŋgɛ nakabɔ́nɛkana kwa amâbɔ
完了現在形 ＋ 同時形
「私はキテンゲ[4]を着て母の前に現われた」
n- hwát - ití kitéŋgɛ n - aka - bɔ́nɛkan - a(dʒɛ́) kwa amábu
S1sg -「着る」- 完F 「キテンゲ(7)」 S1sg- 同T - 「現われる」- 完F 前置詞 「母(1)」

[4] 女性が身体に巻く布の種類。

6.3.2. 並列

複数の等位の節が並列する場合には，節と節の間に等位接続語 naが入る。それらの節の主語が同じである場合には，２つめ以降は不定詞で表わす。２つ以上のことを命令する並列の命令もこれと同様である。

51) bandu alīlɛ́ nu kúhina nu kúdʒemba 「人々は食べて歌って踊った」

完了過去形 ＋na＋ 不定形＋na＋ 不定形

bándu a - a - lé - iti na kúhina na kúdʒemba

「人々(2)」 S3pl - 過 T-「食べる」-完 F 等位 不定形「踊る」 等位 不定形「歌う」

52) dʒudʒalika úgwalɛ, ná nɛ ŋolo ibêga

単純現在形 ＋ na ＋ 単純現在形

「彼女は練り粥をつくり，私は洗い物をする」

dʒu- dʒálik - a úgwali, na né n - gólo(l-a) ibéga

S3sg-「料理する」- 基 F 「練り粥(14)」 等位 「私」 S1sg-「洗う」- 基 F 「土鍋(8)」

53) gusómâ kitábu asę̂ nu kúmbwagila kipwagá bɔ

現在希求形 ＋na ＋ 不定形

「この本を読んで，それからそこに何が書いてあったか私に話しなさい」

gu -sóm - a kitábu asę na kú-n-pwag-il-a ki - pwág-a bɔ(lɛ́)

S2sg-「読む」-希 F 「本(7)」「この(7)」 等位 不定形「私に伝える」 S(7)-「言う」-基 F 「どう」

6.4. まとめ

この章では，マテンゴ語の文の構造に注目し，be 動詞文，複文をはじめとする文の種類とその構造，用法について示した。５章で触れなかった複文にのみ現われる活用形についてもこの章で扱った。また，５章ですでにあげた活用形については，それらが複文の中で用いられる場合にどのように機能するか，この章でより詳しく説明した。